

沖縄周辺重要水産資源調査

喜屋武俊彦

本調査は国庫委託を受けて昭和47年から継続実施しており、詳細は「昭和57年度沖縄周辺重要水産資源調査結果報告書」として報告した。

1 目的および内容

本県周辺海域の主要魚種であるカツオ・タカサゴ類、アイゴについて漁獲物を購入し、それらを通じて成長と年令、成熟、産卵、系統群等の知見を得るために個体生態調査を実施し、また漁獲量の変動を知るために水揚地における漁獲量調査を実施し、資源量等を把握してこれらを対象とする漁業の管理および合理的生産体系の確立をはかる。

カツオ1本釣漁業は本県の重要漁業であり、特に南方カツオ漁業の水揚量は昭和53年には5万7千トンで、本県魚類水揚量の65%以上を占めていたが、今年は不況のために海外基地の閉鎖がみられ、ソロモン、パラオの基地のみの操業で水揚量は前年の半分以下であった。近海カツオ1本釣は沖縄本島の本部・宮古・八重山を中心にして操業しており、今年は前年を上回る漁であった。今年はカツオ類対象の浮魚礁（パヤオ）が宮古島周辺海域に設置され、1部ではマグロ主体に好漁がみられた。糸満のひき縄のカツオ類は前年より漁は良かった。

タカサゴ類は本県の伝統的漁法である追込網で漁獲されており、沿岸域での唯一の多獲性魚種である。県漁連市場に水揚げされるタカサゴ類は本県全体のタカサゴ類水揚量の60～70%を占め、昭和54年をピークに横ばい状態で推移し、今年は前年の80%の水揚量で減少した。しかし土井の迅速解析手法で資源の解析と診断を行なった結果はまだ資源には余裕があることがわかった。

アイゴ類は沿岸域の網漁業にとって重要な魚種であり、本県にも12種生息しているがその生態は十分には把握されていない。特に2～3種の幼魚はスクと呼ばれ、旧暦の6月1日および15日前後に大量に沿岸域に集まり、塩辛原料として大量に捕獲されている。勝連漁協に水揚げされたアイゴは5.6トンで前年より大巾に減少した。

なおこの調査を進めるにあたり、標本魚の購入、セリ帳の集計に便宜を与えられた各関係漁協に厚く御礼を述べたい。

2 要 約

(1) 沖縄本島の本部、宮古、石垣のカツオ1本釣、南方カツオ1本釣、糸満のひき縄、県漁連のタカサゴ類、勝連のアイゴの水揚量調査を実施した。タカサゴ類とアイゴについては魚体を購入して個体生態調査（体長・体重・胃内容物・生殖腺調査）を実施した。

(2) 関連調査として県漁連、那覇地区漁協、糸満漁協の3地区のセリ帳よりハマダイ、ハマフェキ、スジアラ、アオリイカの水揚量調査を実施した。

(3) 本部のカツオの水揚量は300トン、前年比75%で減少した。1隻当たり水揚量は100トンで水揚量同様減少した。（図1）、宮古のカツオの水揚量は1,023トン、前年比148%で大巾に増加し

た。1隻当り水揚量は54トンで前年より増加したが本部の約半分であった。(図2)、石垣のカツオの水揚量は878トン、前年比124%で若干増加した。1隻当り水揚量は80トンで水揚量同様若干増加した。(図3)、南方カツオの水揚量は12,341トン、前年比49%で大巾に減少した。1隻当り水揚量は726トンで前年比141%で増加したが、出漁隻数は17隻で前年の約3分の1であった。

(図4)

(4) 糸満のひき縄の水揚量は41.7トン、前年比128%で増加した。1日1隻当り水揚量は37kgで前年より大巾に増加した。(図5)、魚種別水揚量をみると、カツオ類は6トンで前年以上、マグロ類は12.6トンで前年より大巾に増加、カジキ類は16.4トンで前年の2倍以上で大巾に増加、シイラは1.3トンで前年並、サワラ類は3.6トンで前年より大巾に減少した。魚種別の水揚割合は、カジキ類39%、マグロ類30%、カツオ類15%、サワラ類9%、シイラ類3%であった。

(5) 県漁連市場に水揚されたタカサゴ類は526トン、前年比80%であった。1日1隻当り水揚量も前年以下であった。(図6)

(6) タカサゴの体長・体重測定を年9回、868尾、胃内容物、生殖腺調査を180尾実施した。最大体長は24.6cmで10月に出現し、最小体長は10.5cmで12月に出現した。クマササハナムロの体長、体重測定を年6回、335尾、胃内容物、生殖腺調査を120尾実施した。最大体長は23.6cmで10月に出現し、最小体長は11.7cmで同じく10月に出現した。ニセタカサゴの体長、体重測定を年8回、189尾、胃内容物、生殖腺調査を89尾実施した。最大体長は26.9cmで9月に出現し、最小体長は12.3cmで12月に出現した。イッセンタカサゴの体長・体重・胃内容物・生殖腺調査を36尾実施した。最大体長は16.8cmで7月に出現し、最小体長は12.3cmで1月に出現した。

(7) 勝連漁協に水揚されたアイゴは5.6トン、前年比48%で大巾に減少した。1日1隻当り水揚量は4.5kgで前年以下であった。

(8) アイゴの体長・体重測定を年8回、219尾、胃内容物、生殖腺調査を167尾実施した。最大体長は30.4cmで11月に出現し、最小体長は18.0cmで8月に出現した。

(9) ハマダイの県漁連における水揚量は212トン、前年比112%で若干増加した。1日1隻当り水揚量は83.8kgで水揚量同様若干増加した。那覇地区漁協の水揚量は113トン、前年比100%で前年並、1日1隻当り水揚量は136.8kgでほぼ前年並であった。糸満漁協の水揚量は10トン、前年比126%で増加した。1日1隻当り水揚量は31.6kgで前年より増加した。(図7)

(10) ハマフエフキの県漁連における水揚量は27トン、前年比75%で減少した。1日1隻当り水揚量は9.2kgで前年以下であった。那覇地区漁協の水揚量は5トン、前年比188%で大巾に増加したが昭和50年の約5分の1の量であった。1日1隻当り水揚量は12.3kgで前年並であった。糸満漁協の水揚量は20トン、前年比63%で大巾に減少した。1日1隻当り水揚量は13.6kgで水揚量同様減少した。(図8)

(11) スジアラの県漁連における水揚量は87トン、前年比109%で若干増加、1日1隻当り水揚量は11.5kgで前年より若干増加した。那覇地区漁協の水揚量は6トン、前年比185%で大巾に増加、

1日1隻当り水揚量は17.5kgで前年より大巾に増加した。糸満漁協の水揚量は10トン、前年比83%で若干減少した。1日1隻当り水揚量は11.3kgで前年より若干増加した。(図9)

⑫ アオリイカの県漁連における水揚量は66トン、前年比112%で若干増加、1日1隻当り水揚量は28.3kgで昭和48年以降最低の年であった。那覇地区漁協の水揚量は6トン、前年比156%で大巾に増加した。1日1隻当り水揚量は10.2kgで前年より減少した。糸満漁協の水揚量は4.5トンで前年並、1日1隻当り水揚量は5.0kgで前年以下であった。

3 今後の課題

タカサゴ類幼魚のサネーラの漁獲量を把握する必要がある。アイゴについては産卵生態を明らかにする必要がある。

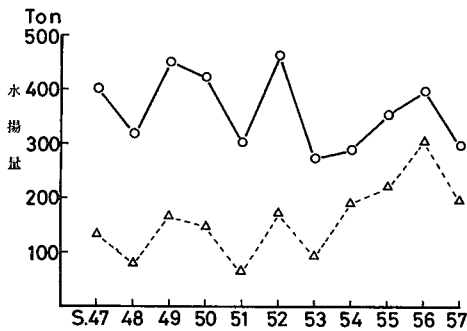


図-1 カツオ水揚量、1隻当り水揚量経年変化 (本部)

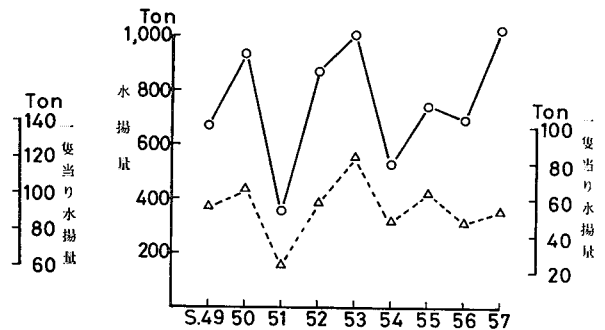


図-2 カツオ水揚量、1隻当り水揚量経年変化 (宮古)

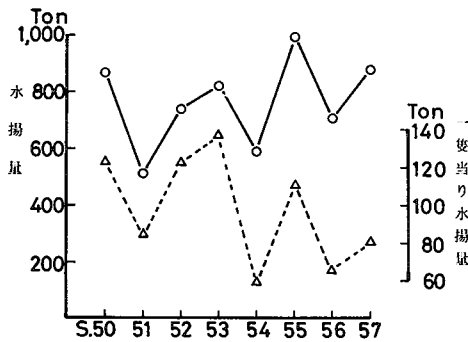


図-3 カツオ水揚量、1隻当り水揚量経年変化 (石垣)

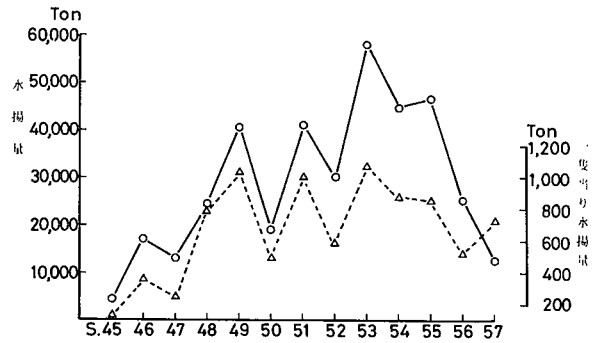


図-4 南方カツオ水揚量、1隻当り水揚量経年変化

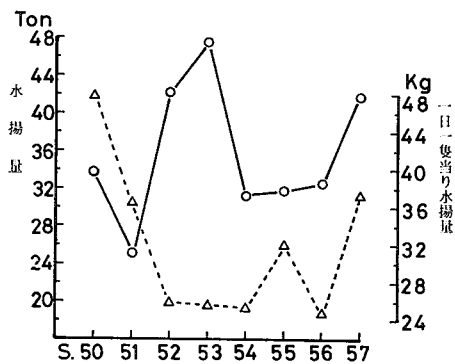


図-5 ひき縄水揚量、1日1隻当り水揚量経年変化

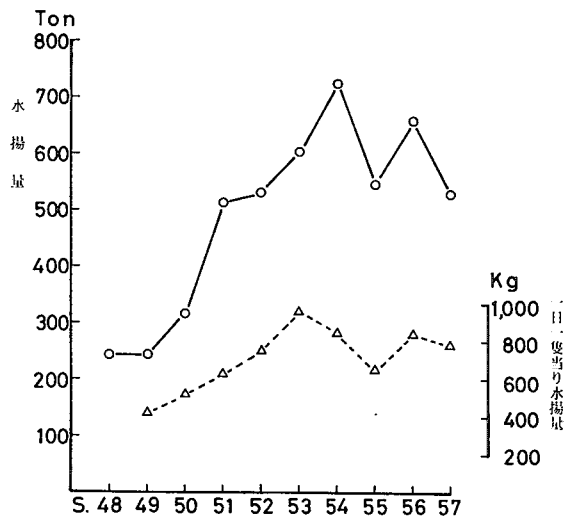


図-6 タカサゴ追込網水揚量、1日1隻当り水揚量経年変化

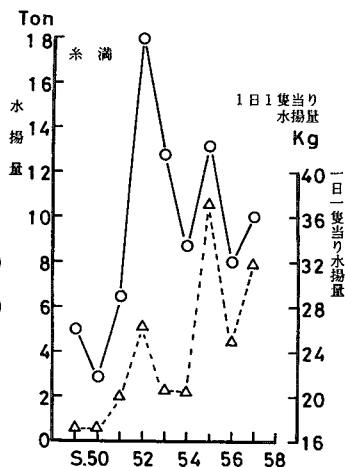
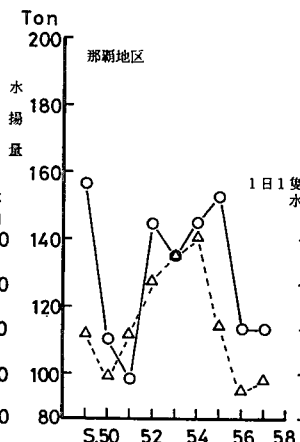
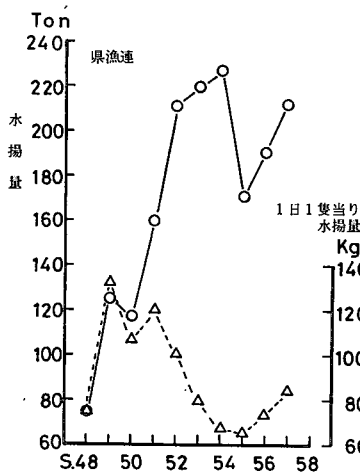


図-7 3市場におけるハマダイ水揚量、1日1隻当り水揚量経年変化

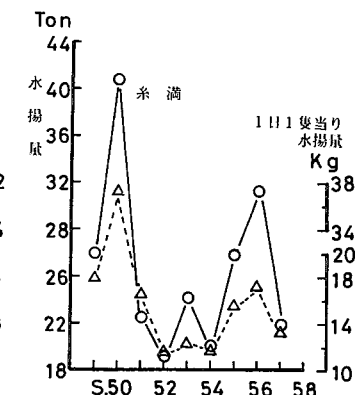
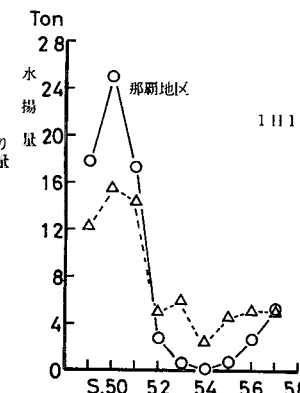
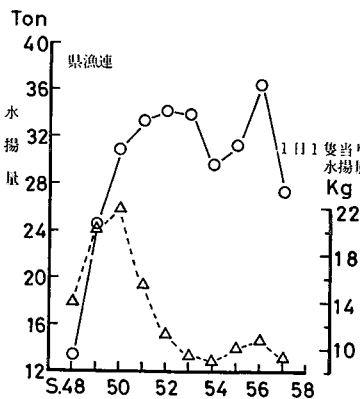


図-8 3市場におけるハマフエキ水揚量、1日1隻当り水揚量経年変化

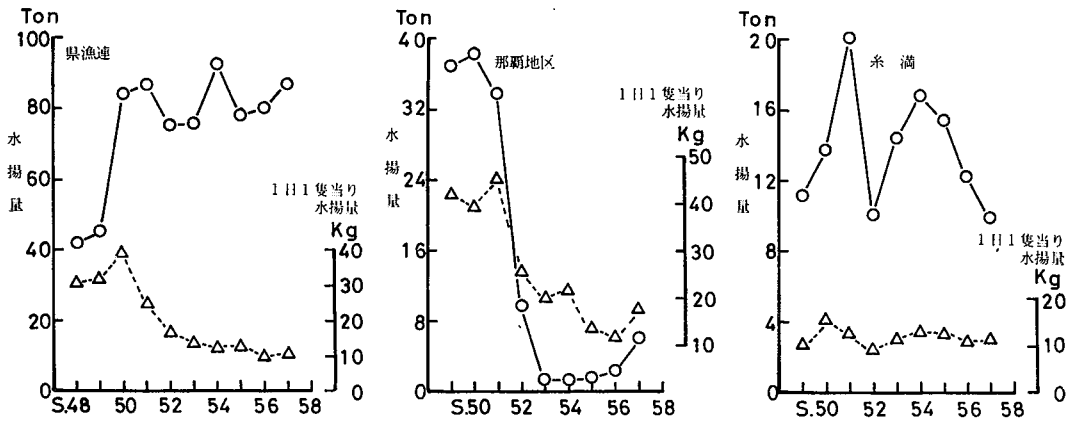


図-9 3市場におけるスジアラ水揚量・1日1隻当り水揚量経年変化

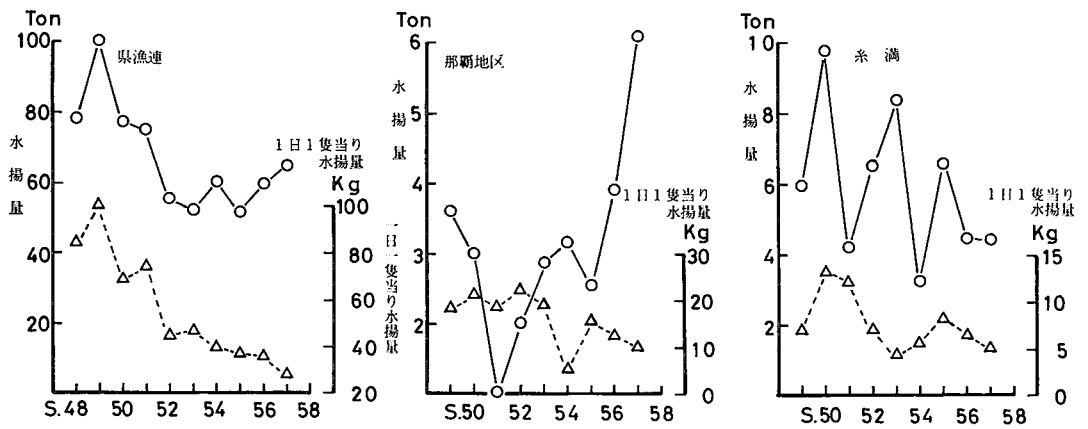


図-10 3市場におけるアオリイカ水揚量・1日1隻当り水揚量経年変化